

とって おきの 話

—それは、ある歴史的「広告」から始まった—

水上 龍郎

1995

昨年の初冬、2日間の出張から帰京して翌朝のことである。入社していつものように机の上に置かれた不在連絡メモを見ていると、中に私の関心をことさらにかき立てたメモが1枚あった。それは、かくかくしかじかの所へ電話を欲しいというだけの内容であったが、なぜこのように私の注目を惹いたかといえは、発信人のお名前が、〈岡地さん〉と書いてあったからである。そして、私の記憶の中では、この苗字から特定できる方はひとりしかいない—あの先生だ。

岡地さん、すなわち、株式会社自動翻訳研究所の所長〈岡地榮〉氏その人である。OSTECの会員はいうまでもなく、工業英語に多少なりともかかわりのある人なら誰でも知っている、あるいは少なくともお名前と著書だけは知っている、翻訳業界の著名人である。私自身は、しばらく先生とは疎遠勝ちだった。

もう20数年も前になるが、まだ工業英語というものがほんの搖籃期にあったころ、私は縁あって岡地先生とご一緒に仕事をさせていただいたことがあり、そのときが最初の出会いであった。ある団体が企画した工業英語セミナーのジョイント講師としてである。先生はすでに、工業英語に関する著書を多数世に出しておいでになり、私の書架にも「工業英語便覧」と「和英てにをは発想辞典」が並んでいた。この種の学習書や研究書が少なかった時代、先生の著書は私たちにとってバイブルのような存在であった、といつて少しも過言ではなからう。

さて、私は先生のご要請を受けて、その中身は一切白のまま、さっそく電話をさしあげた。そこでわかったことは、先生がご自身の創造された造語「パターン意識」の延長線上で「等価翻訳」という言葉の出所を探っておいでになったところ、最終的に私という人間にぶつかったので、ご自分の調査結果の真偽を明らかにするため連絡をとったとのことであった。

実をいうと、「等価翻訳」という言葉を私自身がどのようなコンセプトで使いはじめたか、その根元を顕在化するのは困難である。いまでも、各種セミナーや会合ではこの言葉を必ず使用して言語間の対応とは何かを説明してはいるが、その源流すなわち何故この言葉に執着して熱弁をふるいたがるか(?)についてはあらためて意識することはなく、ほとんど臆蔵としている。

このような私のメモリに鉄槌を落としその惰眠を醒ましてくれたのは、先生の指摘する一枚の広告(雑誌「工業英語」1978年1月号掲載)だった。それは、私が1990年まで経営していた株式会社日本テックの広告である。(ちなみに、現在は日本テックを長子に任せ、株式会社スマーテックを別に設立、その代表としてわずかに

糊口を浚いでいる。) 先生が他社のちっぽけな一広告をよく覚えておいでになったと私はまことに驚いているが、これは先生の日頃の学究的な精神のあらわれ、あるいは著述の典拠をないがしろにしない心の構えであろうと、いまさらながら感服せざるを得ない。

それはそれとして、今回先生の関心を寄せられた広告の中の主文は以下のようなものである。

「過不足のない 翻訳—これが (株) 日本テックのモットーです。翻訳とは、ひとつには、ある国の言語と他の国の言語との間に等価な (equivalentな) 表現を求めることです。言葉と言葉のあわいに <等価表現> の水準をまわすこと...しかし、水準のまわり具合に過不足があってはなりません。適切な対応する等価表現を過不足なく付与することによって正確な翻訳が成立します。欧米の新言語学の分野において <equivalence> <Kongruenz> としばしば言及されている「等価表現」の問題、この問題を (株) 日本テックは過去 20年、とくに技術翻訳の領域で追求してまいりました。

かなり大げさな謳歌で、つくった私としては汗顔の至りだが、これに対して先生は「等価表現」という述語にからめて先生自身の考え方を吐露された。その媒体は、先生ご主宰の工業英語同好会機関誌「バイテック」第1巻第7号 (1995年12月1日発行) であり、記事は学会/業界ルポと銘打たれている。ここに、<述語「等価翻訳」の出所をめぐって> 全文を先生のご許可を得て掲載する。

丸善発行の拙著「デジタル時代の科学技術英語—翻訳方程式入門」(1992)の「やさしい工業英語学/日本語学」篇、「『等価翻訳 (Equivalent Translation)』とは何か?」の章(23頁)の冒頭には、「『等価翻訳』は別名<パターン意識』」の小見出しの下、下記の文章があります。

筆者は以前、日本工業新聞社刊「日工フォーラム」誌、インタープレス刊「工業英語」誌、工業調査会刊「機械と工具」誌に、「パターン意識」という言葉を使って、工業英語講座を連載していましたが、「パターン意識」を英語に訳した場合、Pattern-to-Pattern TranslationよりEquivalent Translationの方が英語として分かりやすいので、最近ではこの言葉を使っています。

実は、この文は、(株) 日本自動翻訳研究所発行の「バイリンガル テク

ニカルライター 第1号」(1988)に載ったものであり、その前の年に書いたものですが、書いた時、それよりだいぶ前、水上龍郎先生の翻訳会社の広告(「工業英語」誌に載った広告)に、「今欧米の翻訳界ではequivalenceな翻訳ということが問題になっている」という言葉が確か載っていたはず、とすれば、水上先生に一言御挨拶すべきかな、と思いつつ、その後、丸善発行の本も出てしまいました。

しかし、このことは、ずっと心のどこかで気になっていて、昨年二月頃、アイピーシー(旧インタープレス)社長藤岡啓介氏にお会いした時も、同氏と、「藤岡さん、<等価翻訳>って言葉、確か水上先生が<工業英語>誌の初期の号の広告でお使いになっていたと思います。御記憶はありませんか」、「いや、ありません」「では、もし水上先生にお会いになる機会があったら、聞いてみて頂けませんか」、というようなやり取りがありました。そして、この話は、それきりになってしまいました。

ところが、今年11月初め、ある方から、「〇〇という人が<等価翻訳>という言葉のある本(非技術英語界の本)で使っています。その本は、先生の丸善の本よりだいぶ前の本です。...とすれば、日本で最初にこの言葉を使った人は誰でしょう。」というような内容のお電話を頂きました。「これは大きな問題になって来た」と思いながら、「それは、少なくとも工業英語界においては、水上先生です」とは、確たる自信もないのにお答えできませんでした。

そこで、その方とのお電話が終わるとすぐに、水上先生の会社の電話番号を日本翻訳連盟に問い合わせ、先生と御連絡ができ、「私の丸善の本には、equivalent translationという言葉が載っていますが、この言葉を、工業英語界で最初にお使いになったのは、確か水上先生です。丸善の本が出る時、お電話すべきだったのですが、今日まで延びてしまっていて、申しわけありませんでした。日本の工業英語界の為にも、この際、最初に紹介された方を明かし、記録として私どもの機関誌で発表し、御功績を讃えたいので、できましたら、当時の広告のコピーをお送り下さい。」とお願いしました。

そうしましたら、11月20日付で、別紙の「広告」(「工業英語」誌1978年1月号所載)のコピーをお送り頂きました。やはり、私の記憶に間違いはありませんでした。ただし、上記「欧米の翻訳界」は、「欧米の新言語学の分野」の記憶ほけでした。早速、水上先生に感謝のお電話を申し上げますととも

とよんでいる。簡単にいえば、等価翻訳とは異なる言語間で正しい換算値を求めることであろう。日本語（または英語）〇〇〇〇を翻訳した英語（または日本語）△△△△は、お互いに相手の換算値として同じ価値（内容）を伝えていなければならない。

しかも、言語変換においては、数値変換とはちがって、公式のようなものに当てはめることがむずかしく、その言語を使っている人たちの民族、風習、歴史なども反映しないと、数量的にも品質的にも等価にはならない。すなわち、〈過不足なく〉変換したとはいえない。翻訳とは、いかにも果ての知れない言語地獄である。

価値（値）"value"は力"force/power"と同義であると仮定すれば、〇〇〇〇と△△△△は、この2つの異種言語のもつ力が等しくなってこそ、はじめて等価翻訳といえるであろう。たとえば、"Keep the cables out of the way."を〈ケーブルを通り道から離しておけ〉は明らかに等価翻訳でなく、〈ケーブルを通り道に避わせるな〉が等価であるといえまいか。「三寒四温」を"three cold days and four warm days"とすれば、数量的には同等であっても質的にはどうか、せめて、"Spring comes with timid steps."程度の生きた対応にならないか、などなど。このように訳出する背景には、前者では、英語の肯定文と日本語の否定文が言語の力（相手に伝達し相手を動かす力）で同等になる（ことがある）という経験的知識が必要であり、後者では、言葉そのものの常識的な起源と意味を問われることになるであろう。

〈等価表現〉〈生きた対応〉については、もっと具体的にどこかで発表してみたい。ともあれ、この夢を再び見るようにと、今度の一件で私を刺激していただいた（と私は思っている）岡地先生には心から感謝したい。

(OSTECジャーナル 第4号 1998年3月)